注(6)　大肝入（大肝煎）の漢語表現。

注(7)　成文法

資料　仙台志料上巻（岡　千仞）

仙台人名大辞書（菊田定郷）

東藩史稿巻之32（作並清亮）

4. 小野清について

問　大阪城の研究書としては最高の名著「大阪城誌」の著者、小野清は仙台の人であると聞いてますが、その略歴を知らせてください。

答　弘化3年〔1846〕9月、仙台北五番丁に生れた偉大な博学者であります。字は子粛、通称伊右衛門、号は静修。幼時読書及び書道を白石権太夫〔林子平の墓碑銘を揮毫した書家〕に学び、9才の時養賢堂に入り、10才で四書五経の考試に合格して、第13代伊達慶邦から「小学」及び「近思録」を賞賜されました。慶応2年(1)〔1866〕(2)江戸に留学し、大学頭林学斎(3)・幕儒芳野(4)金陵(5)に学び、剣道を桃井左右八郎（小野派一刀流）・千葉道三郎（北辰一刀流）・小田善速（影山流）に学んで、文武両道を究めました。丁度この頃奇しくも、林大学頭の家中の軍事教師に招かれていた星恂太郎〔後の額兵隊長〕との林邸内における出合いがあります。

慶応4年〔1868〕仙台が会津討伐の勅命を受けた際、副参謀として出征しました。戦後、静岡でフランス語、横浜でドイツ語を修め、更に慶応義塾で英語を学びました。明治8年〔1875〕福沢諭吉の推薦で内務省衛生局に勤め、東京・横浜・大阪の各司薬場〔衛生試験所〕の創立に当りました。のち本省に戻り、わが国最初の医師開業免許制度を樹立しました。

その著書に、「日本城郭誌」「大阪城誌」（全12巻、明治32刊）「刑法一覧表」「天文要覧」「安土城誌」「江戸城誌」「名古屋城誌」「伏見城誌」等があり、いずれも充実した大作であります。特に「天文要覧」は、明治元年京都に赴く時、天文学者古山貞と同行し、毎夜宿で天文学の手ほどきを受けたことが基礎になっだのだといいます。翌2年、横浜にあったドイツ公使館員ドクトル・ベルソンからドイツの星図を示されて大いに感奮し、印度・支那・日本のあらゆる天文書を渉猟し、50年の歳月にわたって心血を注ぎ、大正4年〔1915〕完成し、天覧にも供した名著であります。

小野清は、仙台藩の第5代伊達吉村時代、江戸芝邸の奥方に30余年仕えた首席老女歌島の局の孫に当り、額兵隊の鼓手から後に陸軍歩兵大佐(6)となった島野翠がその実弟です。永く他郷にありながら、強い愛郷心の持主でありました。絶えず卓越した研究業績(7)を生み出すかたわら、常に県人とのよき交わりを続け、偉大な先輩として尊敬されました。その一つとして、東京の城北宮城県人会の

機関誌「ふるさと」にも、毎号のように郷土研究の論文を寄せていました。それが、死の直前まで続いているなど並大抵のことではありませんでした。

昭和７年〔1932〕自宅において死去、87才、多摩墓地に葬られました。

注(1)　「大学」「中庸」「論語」「孟子」の総称。

注(2)　「易経」「詩経」「書経」「春秋」「礼記」。

注(3)　第11代伊達斉義の二男、第12代斉邦の義弟。文政８年〔1825〕９月６日 仙台に生れた。幼名穣三郎のち藤次郎、諱は慶邦、初諱は寿村また慶寿。天保12年〔1841〕９月７日襲封し第13代当主となる。仙台戊辰史の主役として未曽有の難局に当ったが、非運のうちに明治元年〔1868〕引退を命ぜられて隠居し楽山と号した。「やくたい草」などの随筆の著作がある。明治７年７月12日病歿、享年50才、武蔵国豊島郡駒込村に神式で葬ったが、明治23年４月仙台〔当時名取郡茂ケ崎村〕大年寺墓地に改葬した。

注(4)　洒掃・応対・進退などの作法・嘉言・善行を古今の書から抜萃蒐集し、支那小学〔夏殷周３代の学校で、当時の普通教育である進退・洒掃・造字の根本を学ばせた。８才から入学させた。〕の課目を示した書。内外２篇、６巻。劉子澄が朱子の指示を受けて編纂。淳熙14年〔1187〕成る。

注(5)　宋の朱熹・呂祖謙合著。14巻。周茂叔・程明道・程伊川・張横渠４人の語から、日常に緊要な章句622条をとって14門に分類した著。

注(6)　仙台の第５代藩主。幼名を卯之助また助三郎という。延宝８年〔1680〕６月28日、伊達肥前宗房の長子として、黒川郡宮床村に生れた。元禄８年〔1695〕12月、世子となり藤次郎村房といった。翌９年５月将軍綱吉の片諱を受けて吉村と名乗った。元禄16年〔1703〕８月25日、家督を継いだ。藩政を改革し、学問所を創立して教学を奨励し、奢りの弊風を抑え中興の名君といわれた。寛保３年〔1743〕７月25日病のため隠居。宝暦元年〔1751〕12月24日歿、72才。大年寺に葬る、続燈院殿獅山元活大居士と法諡。和歌にすぐれ隣松軒と号し、「隣松集」正続18巻・「花押新集」５巻・「花押後集」６巻・「花押外集」・「武家新歌仙」・「新撰武家百人一首」などの編著がある。

注(7)　幕末額兵隊の鼓手として星恂太郎の旗下にあって箱館で勇戦した。明治初年将校を志して陸軍に入り、歩兵大佐に累進し、従四位勲三等功四級を受けた。昭和３年静岡県沼津市我入道で歿した。仙台市荒町昌伝庵に帰葬した。仙台市長島野武はその第９子である。

資料　仙台人名大辞書（菊田定郷）

史料徳川幕府の制度（小野清）〔の内著者略歴〕

大阪城誌（小野清）〔の内あとがき〕